

第2章 調査研究のフレームワーク設定

本章では、調査研究のテーマである「高齢者の ICT 利活用」をどのような視点・枠組みで調査・分析するかを整理し、調査課題の具体的な設定を行う。また、調査にあたっての仮説、調査方法などのフレームワークを示す。

2-1 本調査のテーマと目的

本調査のテーマは「高齢者・障害者の ICT 利活用の評価及び普及」である。障害者の ICT 利活用については昨年度調査で取り扱ったため、本調査では主として高齢者の ICT 利活用を取り扱うこととした。

「高齢者の ICT 利活用の評価」とは、単に高齢者がどの程度 ICT を利用しているか、ということの評価ではない。本調査研究のテーマは、高齢者が ICT を利活用することにより、いかに充実した生活を送れるようになるかを評価し、そのための支援策、普及策を検討することである。

高齢者の生活が充実していると言うためには様々な生活の要素や側面を見る必要があるが、第1章で見たように、わが国の高齢者は社会に何らかの形で役立ちたいという意欲が高いため、ICT の利活用が、高齢者の積極的な社会参加・社会貢献につながっているかどうかの評価の重要な視点となる。また、急速な高齢化が進む中で、高齢者の適切な社会参加を促進することは、社会の活力を維持・向上させるためにも有効だと考えられる。

そこで、本調査研究では、

- ① 高齢者の ICT 利活用は、高齢者の社会参加・社会貢献にどのように結びついているか
- ② 高齢者の ICT 利活用は、高齢者本人や地域社会にどのようなメリットをもたらしているか
- ③ 高齢者の ICT 習得と利活用を継続し社会参加に結びつけるには、どのような支援が有効かを調査課題として、取り組みの事例収集や、高齢者及びその支援者の意識調査を行うこととした。

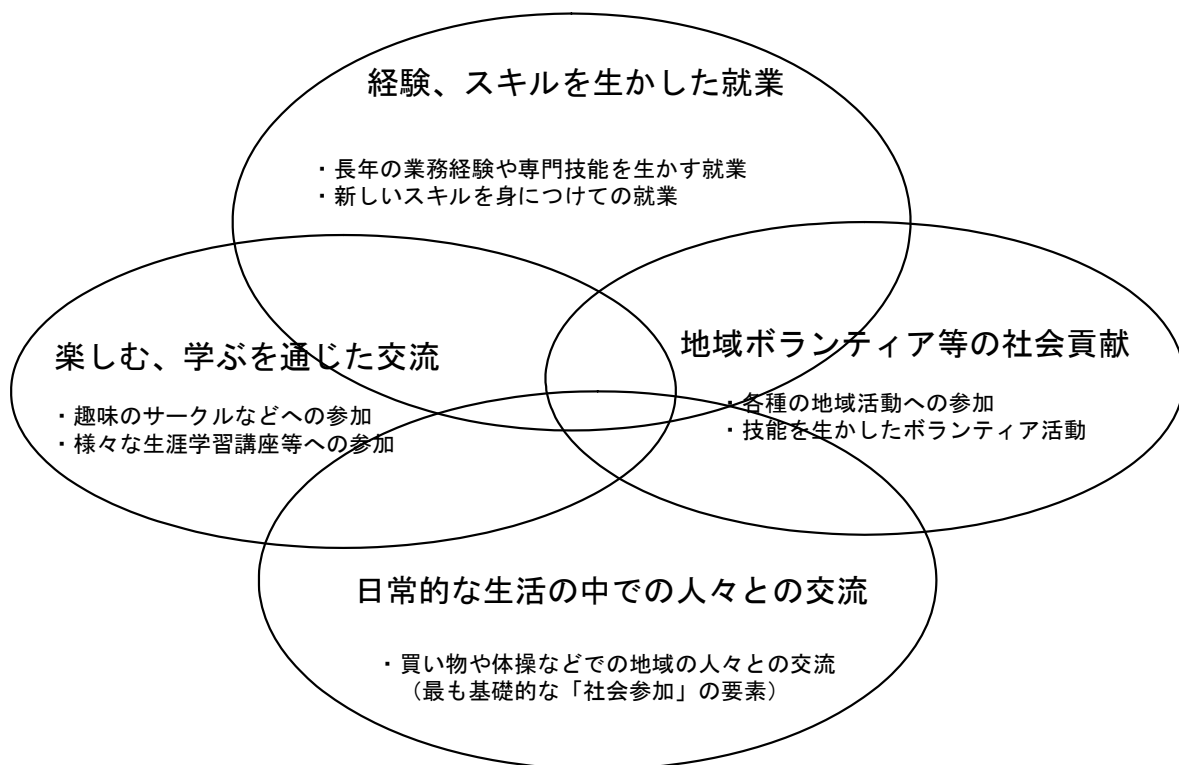
2-2 本調査研究における「社会参加」の対象範囲

第1章で見たように、高齢者の「社会参加」は、就労・就業に限らず、より幅広い目的・目標を含んだ多様な活動として捉える必要がある。

自らの経験やスキルを生かして働きたいと考える高齢者は多いと言われており、高齢者にとって就労は重要な社会参加の要素である。しかし、高齢者にとっては生活をどのように充実させたいかという目的意識や目標も様々であり、就労・就業だけでなく、ボランティア活動による社会貢献、様々な地域活動への参加や地域の幅広い世代の人たちとの交流、同じ趣味を持つ人たちとの交流やサークル活動、さらには日常の生活行動の中での地域の人々とのふれあいなども重要な社会参加の要素となる。さらに、実際の高齢者の社会参加では、これらの要素がミックスされているものも多い。

そこで、本調査研究では、高齢者にとっての「社会参加」を、上記のような多様な要素を含むものと捉え、これらの幅広い社会参加を促進する ICT 利活用のあり方、その支援のあり方について調査・検討することとした。

図表 2-1 高齢者にとっての社会参加の多様性



2-3 高齢者のICT利活用に関する視点の設定

(1) 高齢者の多様性と ICT 利活用、社会参加に関する視点の整理

「高齢者」には、様々な年齢、履歴、健康状態の人々が含まれ、非常に多様である。ICT利活用の効果を検証・評価する際にも、高齢者の多様性を十分に考慮する必要がある。

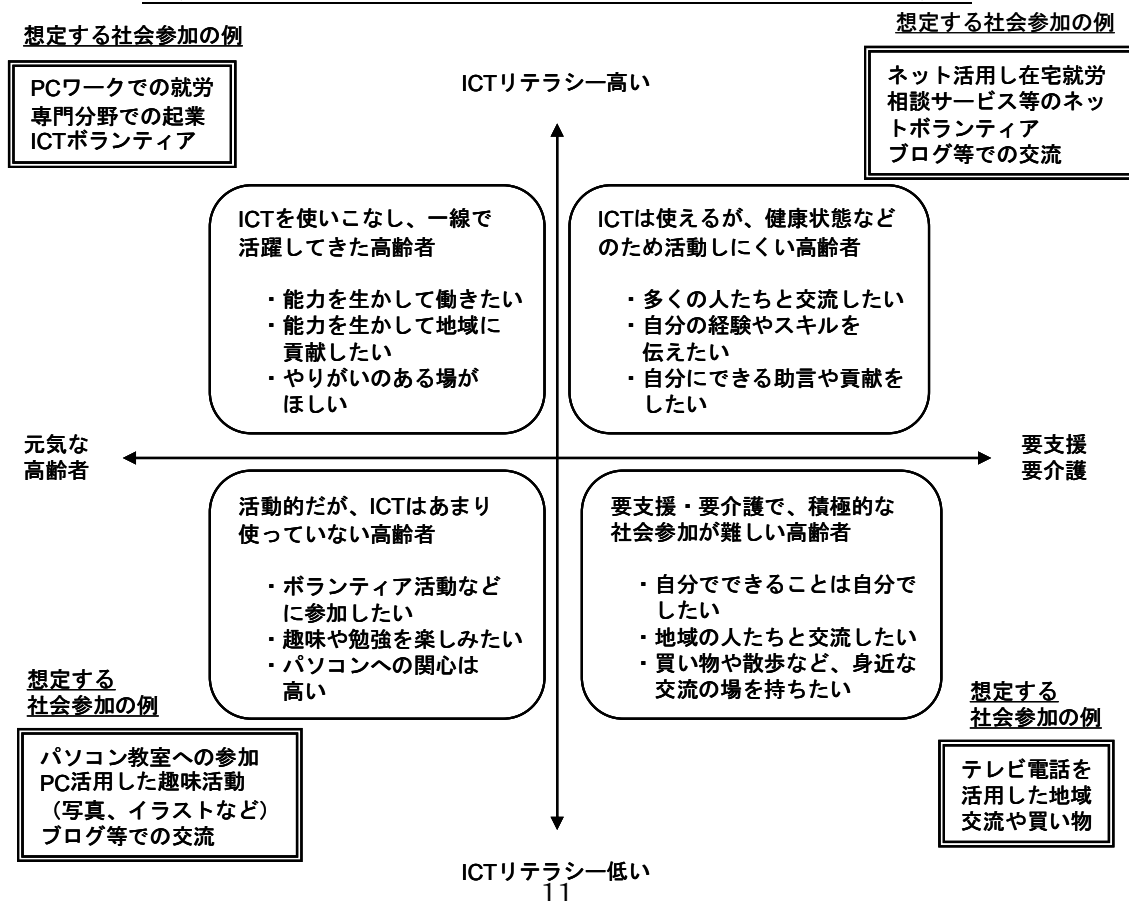
高齢者の ICT 利用経験やスキルは非常に多様であり、最先端の技術者として活躍してきた人から、PCや携帯電話を全く利用しない人までが含まれる。ICT利用率は次第に高まってきているものの、現段階では十分な ICT 利用経験や利用スキルを持たない、ICT リテラシー（親和性）の低い高齢者が多数を占めると考えられる。

一方、高齢者の健康状態や生活の自立度も様々であり、そうした高齢者自身の状態・状況によって、目標となる社会参加のあり方も変わってくると考えられる。

ICTの利活用は、これらの多様な高齢者のいずれの人々にとっても有効だと考えられるが、その利用の内容や目標、必要な支援はそれぞれ異なるはずである。

以上のような基本的な認識をもとに、本調査研究では、高齢者の ICT リテラシーと生活の自立度・自由度を視点として高齢者の多様性を4つの類型で把握し、それぞれの類型での ICT 利活用効果や支援のあり方を調査・検討した。

図表 2-2 高齢者自身の多様性と、社会参加のあり方の類型

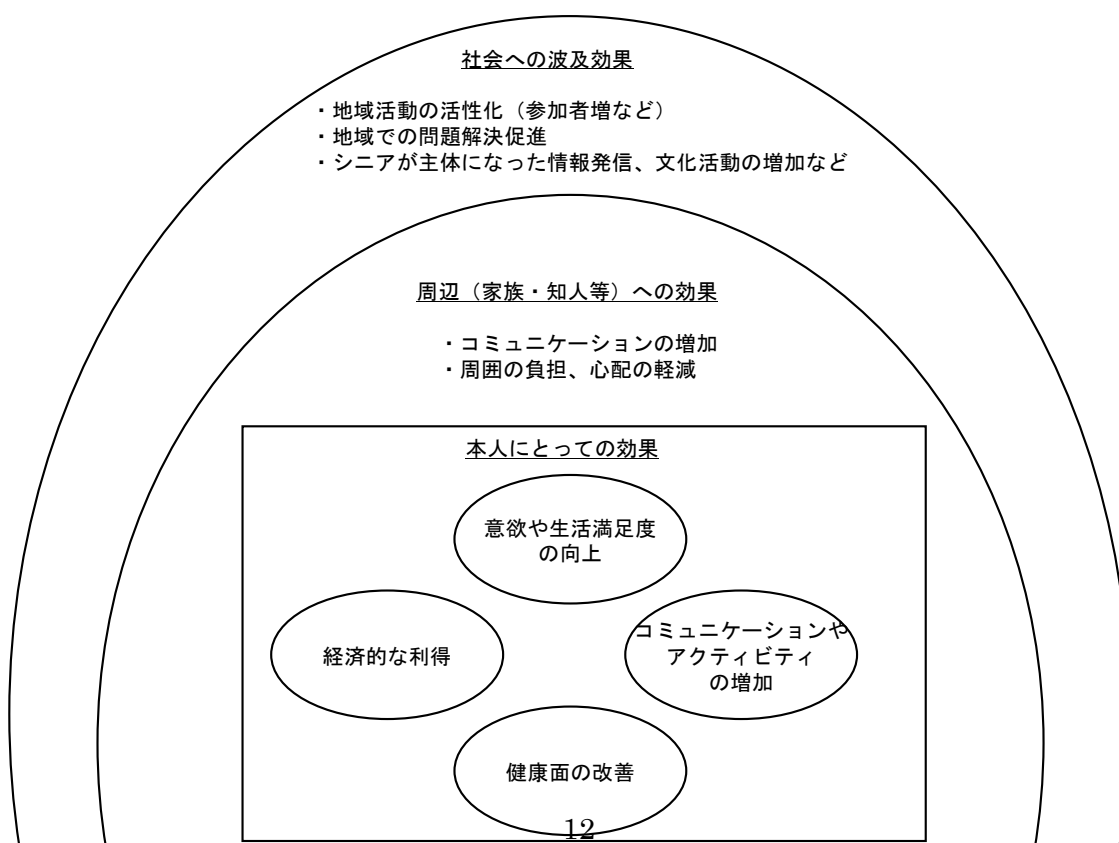


(2) 高齢者の ICT 利活用効果についての考え方

高齢者の ICT 利活用の効果については様々な観点があり得るが、本人にとっての直接の効果はまず周囲とのコミュニケーションが活発化し、そこから様々な行動が生まれることであろう。ここで言う「行動」には、友人と会って話をするといったことから、サークルやボランティア等の社会活動への参加、就業等、多様なものが含まれる。こうした活動を通じて経済的な利得がもたらされることもあるが、より一般的に期待できる効果は、生きがいや意欲の向上など、「より自律し満足度の高い生活」を送れるようになることである。また、社会的に孤立せず活動的な生活を送ることは、高齢者の健康の維持・改善や介護予防にもつながると考えられる。本調査研究では以上の想定を踏まえて、ICT 利活用により促進される社会参加によって、高齢者本人が感じる生活の満足度、充実度、生きがい等を中心として利用効果を調査・評価した。

また、社会参加活動には地域社会や経済的な意味での波及効果も期待される。波及効果としては、高齢者と周囲の人との関係の円滑化といったプライベートなものから、高齢者の地域活動の活発化による地域の活性化、高齢者の状態改善による介護・医療コストの低減といった社会的な効果まで様々なものが考えられる。これらの波及効果は、高齢者本人よりも、高齢者の周囲の人々や高齢者が暮らす地域にとって大きな価値や意味があるものである。そこで本調査では、高齢者の ICT 利活用や社会参加活動に関わった支援団体や関係者の目で見えた波及効果についても調査・検証した。

図表 2-3 ICT 利活用効果のモデル



2-4 調査の実施概要

本調査研究では、高齢者の ICT 利活用とその支援活動の状況をできるだけ幅広く把握するために、インターネットでの公開情報や各種資料により、国内での高齢者 ICT 利活用支援の取り組み事例を収集することからスタートした。そして、活動が確認された支援団体と、その支援を受けて ICT を利活用する高齢者本人それぞれに対するアンケート調査を実施した。

さらに、2-3 (1) で整理した類型ごとに、注目すべき取り組みや活動を行っている高齢者及び支援団体にヒアリング調査を行うとともに、活動内容や高齢者本人の利活用効果及び周囲への波及効果、取り組みの課題等について、詳細な情報を収集した。

これらの調査結果をもとに、2-3 (2) に示した利活用効果の考え方をベースに ICT 利活用の効果の整理及び ICT 利活用支援の有効性の検討を行うとともに、高齢者の ICT 利活用推進に有効な総合的支援のあり方を検討し、実際に総合的な支援を行っている事例を取り上げて、その取り組み内容や実施効果・有効性を詳細に調査・検証した。

図表 2-4 調査研究の実施フロー

